

令和4年度秩父市オンライン連載

「秩父氏」をたどる ～その足跡そして現在へ～

秩父市教育委員会文化財保護課

第1回 武士団の起こり

はじめに

「秩父氏」は中世前期の武蔵国の中で有力な地位を築いた武士団です。現在NHKにて放送中の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」に登場している畠山重忠の先祖でもあり、さらにはその畠山氏と並んで鎌倉初期の有力御家人として活躍した河越氏・江戸氏・豊島氏・葛西氏なども、この子孫にあたります。また、「秩父氏」は現在の秩父にもその足跡を色濃く残しています。後世にこれほどの影響を与えた「秩父氏」とは一体どういった武士団だったのでしょうか。

本ページにて、「秩父氏」についての概要やこれまでの研究成果について、全4回に分けて掲載していきます。第1回である今回は、秩父氏・武蔵七党しちとうについて紹介します。

【第2～4回のテーマ】

- 第2回 遺跡・寺院からみた秩父氏 (10月上旬公開予定)
- 第3回 秩父氏の系譜 (11月上旬公開予定)
- 第4回 秩父氏が残した信仰 (12月上旬公開予定)



1 秩父氏とは

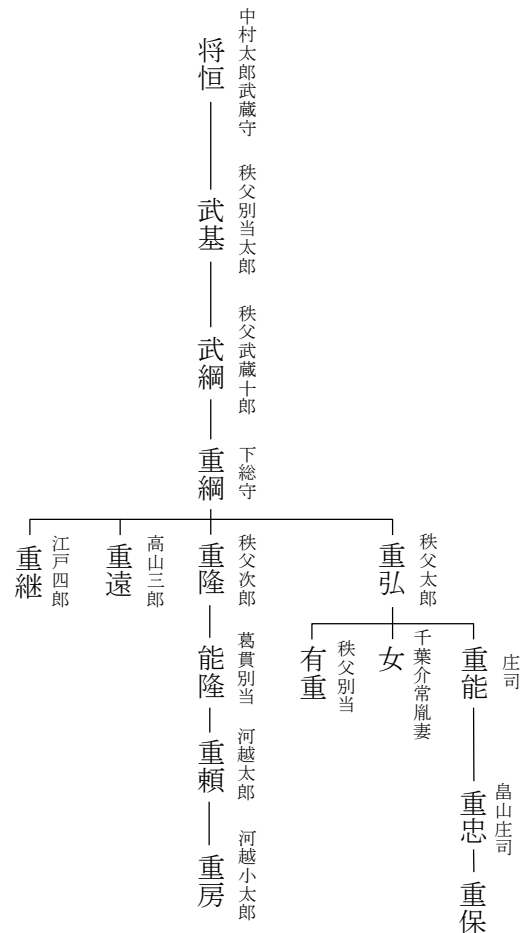
平安時代後期、関東各地に勢力をはった桓武平氏（桓武天皇の子孫で、平の姓を賜った家系）の一門である武士団を「坂東八平氏」と呼び、秩父氏はそのひとつに数えられます。この秩父氏は桓武平氏の一門であることから、「平姓秩父氏」とも呼ばれています。

平将恒が秩父郡中村郷に居館し秩父氏を名乗ったとされ、その後、秩父氏の本流は将恒の子・武基から武綱・重綱へと引き継がれていきます。武基は秩父別当（馬を飼育した「牧」の監督者）を兼ね、その子・武綱は、秩父市下吉田の鶴窪台地上にある、現在の市立吉田小学校周辺に居館したと伝わっています。武綱の子孫は、畠山氏・河越氏・江戸氏等の有力な武蔵武士へ分かれています。

参考文献

秩父市誌編纂委員会編 1962『秩父市誌』

秩父氏一族の系図



※秩父市誌編纂委員会編 1962「下総千葉家の系図」を簡略化したものです。

2 武蔵七党とは

平安時代末期から鎌倉・南北朝時代にかけて、武蔵国には各地に中小規模の在地武士たちによる同族的武士団が存在していました。彼らは「党」と呼ばれ、一般的には『武蔵七党系図』に従って、横山・猪俣・野与・村山・丹・児玉・西が「武蔵七党」といわれています [※1]。

その中でも、丹・児玉の両党は秩父地域に深い関係を持ち、秩父市には丹党中村氏の墓も残されています。二党は秩父氏と古くから婚姻関係を結び、秩父氏が武蔵国においてその勢力を強めていく要因となります。

丹党中村氏は秩父氏を武家の棟梁として受け入れたため、丹党は畠山重忠の時代でも直属軍として重用されました。特に本田近常と榛沢成清は重忠からの信頼が厚かったといわれています。秩父神社文書によると、中村氏は重忠死後も秩父氏の妙見信仰を受け継いだり、落雷の損壊による秩父妙見社の社殿造営を郡内の丹党諸家を率いて行ったりと熱い忠誠心を持っていたことがうかがえます。





児玉党に関しては、牧を通して秩父氏との結びつきを強めていきました。秩父氏の武基が別当として管理をしていた石田牧（現：長瀨町岩田地区）〔※2〕と児玉党が拠点としていた阿久原牧（現：神川町南端地域）は合わせて秩父牧と呼ばれていて、両者が連携して経営に従事していたとみられます。そして、秩父氏は武綱が娘を児玉党の児玉経行に嫁がせたり、その産んだ子を息子・重綱の養子に迎えたりと、婚姻政策を積極的に行うことで山を越えた児玉地域への勢力拡大を目指しました。

〔※1〕野与の代わりに私市きさいを入れる説や綴つづきを入れる説もあります。

〔※2〕石田は「いわた」と読めることから長瀨町岩田とする説と皆野町野巻とする説がある



秩父市指定史跡
丹党中村氏の墓

参考文献

埼玉県立嵐山史跡の博物館 2010『秩父平氏 畠山重忠とその時代』

埼玉県立嵐山史跡の博物館・葛飾区郷土と天文の博物館編 2012『秩父平氏の盛衰—畠山重忠と葛西清重』

埼玉県立歴史資料館編 2006『中世武蔵人物列伝 時代を動かした武士とその周辺』

清水亮著 2018『中世武士 畠山重忠 秩父平氏の嫡流』

安田元久著 2020『武蔵の武士団 その成立と故地を探る』

